

# 全職員を対象とした手指衛生を徹底するための取り組みの実際

NTT東日本伊豆病院

河野 幸恵

# 当院の概要



## ◆診療科

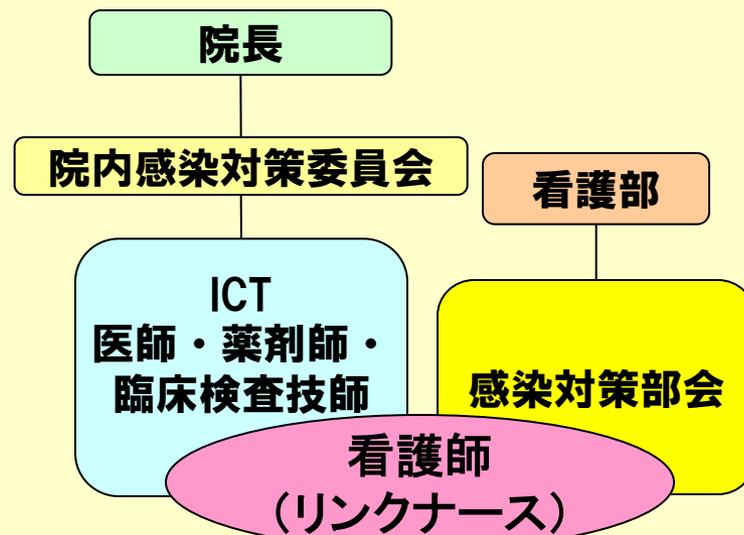
内科・整形外科  
皮膚科・歯科  
リハビリテーション科  
リハビリテーション精神科

## ◆病床数:196床

内科・整形外科50床、  
リハビリテーション精神科46床  
回復期リハビリテーション100床

## 当院におけるリンクナースの役割

- ①サーベランスの実施と感染対策の評価
- ②感染防止技術の指導と評価
- ③感染管理教育
- ④感染管理に関するコンサルテーション
- ⑤職業感染防止技術指導



当院の感染管理組織

# 背景・目的

- ◆手指衛生：医療関連感染症防止において基本的かつ重要な手技 **（推奨する対策：1.手指衛生の徹底）**
- ◆手指衛生のコンプライアンスを高めるには継続的な教育、視覚的な手洗いの評価が効果的

## 当院の取り組み

ブラックライトを用いた手指衛生手技評価：年1回

H15～看護師対象に実施しコンプライアンスが高まった

H17～全職員が適正に手指衛生手技を習得する

必要があるため**患者に直接関わる全職員を対象**に実施

### 目的

- ◆3年間の結果の変化を確認する
- ◆今後の教育活動の課題を検討する

# 取り組み

## ◆院内全手洗い設備に 手順のポスターを掲示



## ◆リンクナースによるラウンド

# 取り組み

## ◆多職種への研修会開催



# 手洗い評価

## 1. 平成20年度の評価実施期間

平成20年11月～21年3月

## 2. 実施者数:208名

## 3. 実施手順

1) 蛍光クリームを用いて  
速乾性手指消毒剤をすり込むように  
塗布し、ブラックライトで塗り斑を確認

2) 蛍光クリームが付いた手指を  
石鹸と流水で手洗いし、  
ブラックライトで洗い残しを確認

## 4. 評価方法:ICTリンクナースが評価

1) 塗り斑と洗い残しを評価表に記入

2) 評価終了後、手指衛生に関する意識を自由記載

3) 比較方法:評価表でむらがあった部位は範囲に関係なく  
集計し、部位別、職種別、3年間の塗り斑と洗い残しを比較

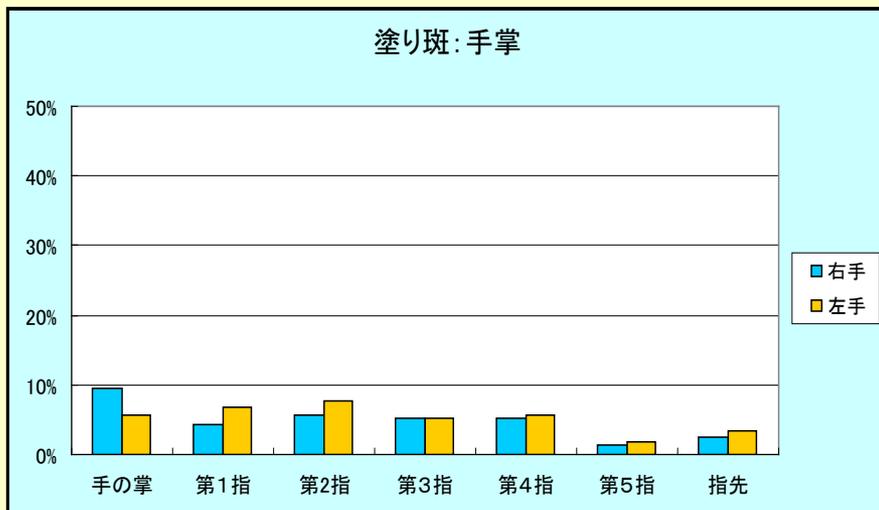
看護師・看護助手・クラーク	129名
医師	6名
療法士	49名
臨床検査技師	14名
診療放射線技師	8名
管理栄養士	2名

実施者職種内訳

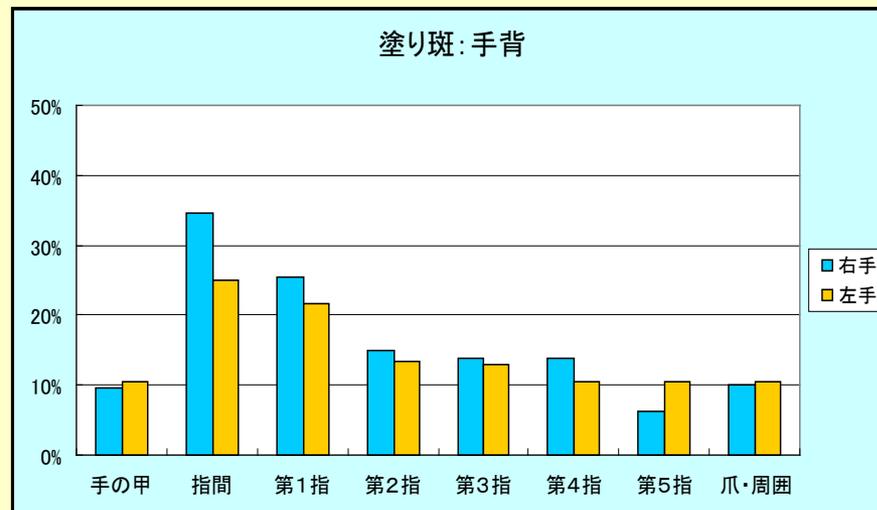


# 結果：部位別

塗り斑：手掌

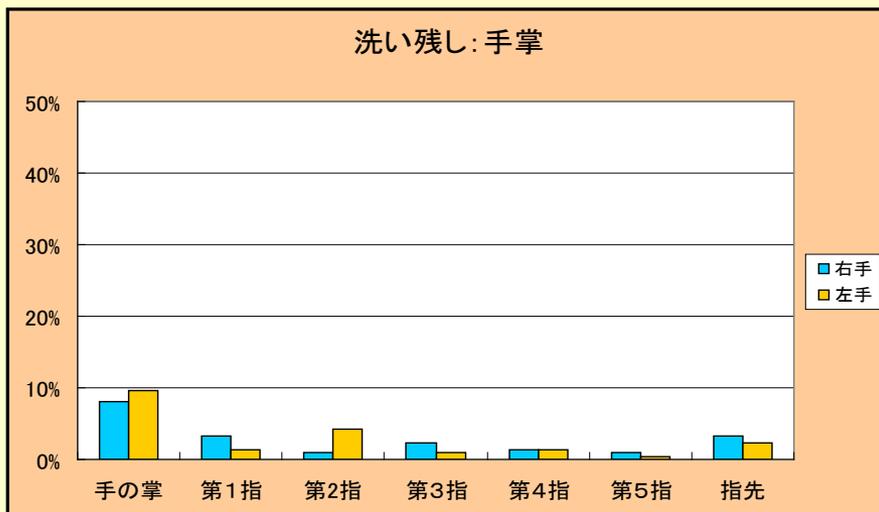


塗り斑：手背

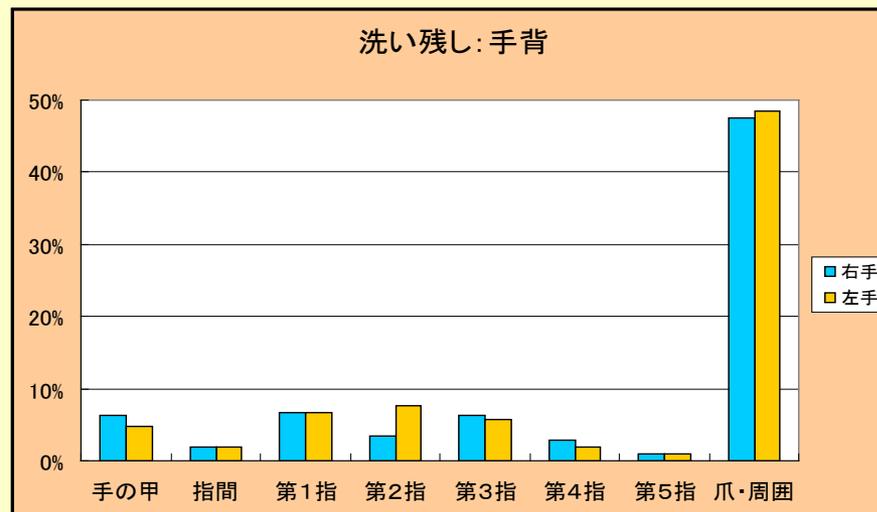


塗り斑は、手掌側、手背側ともに右手に多い・特に指の間と第1指多い

洗い残し：手掌



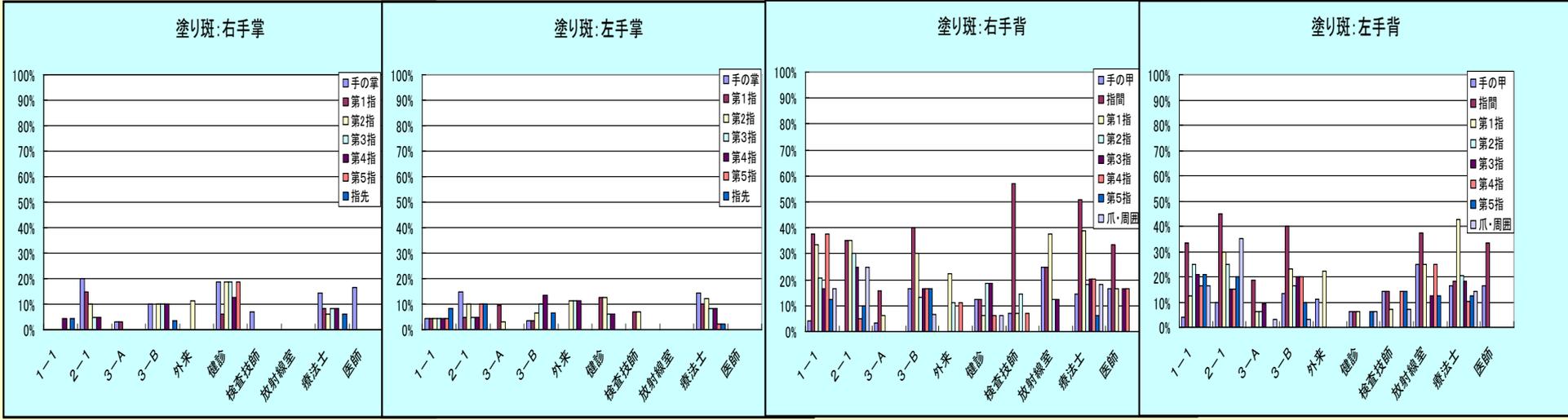
洗い残し：手背



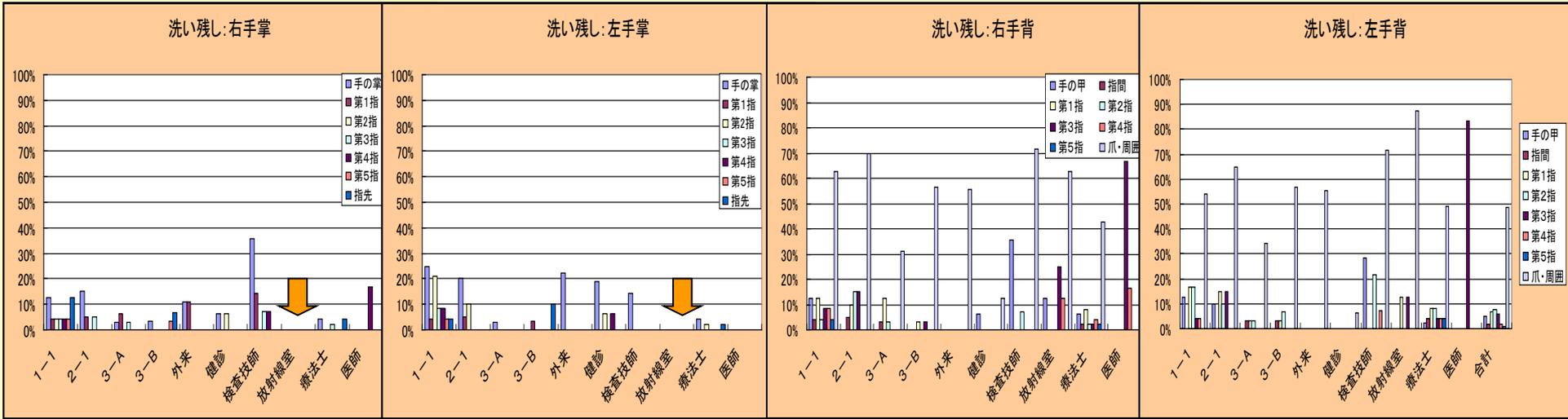
洗い残しは爪とその周囲や手掌、手荒れしている部位に多い

# 結果：職種別

1-1,2-1,3-A,3-Bは病棟名称

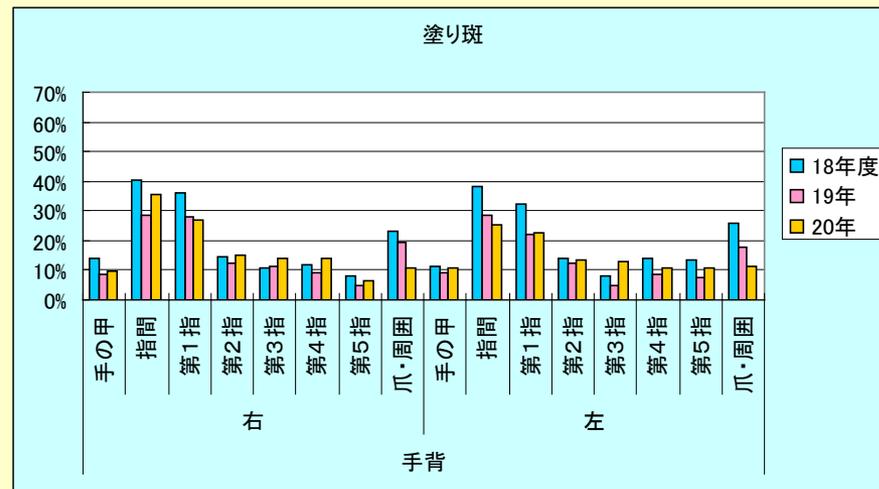
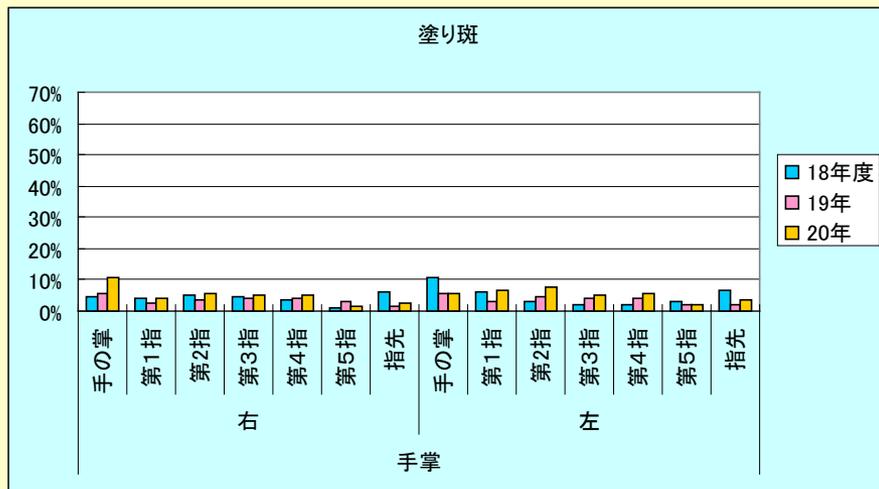


**塗り斑は、どの職種も指の間に多く見られた・手掌より手背に多い**

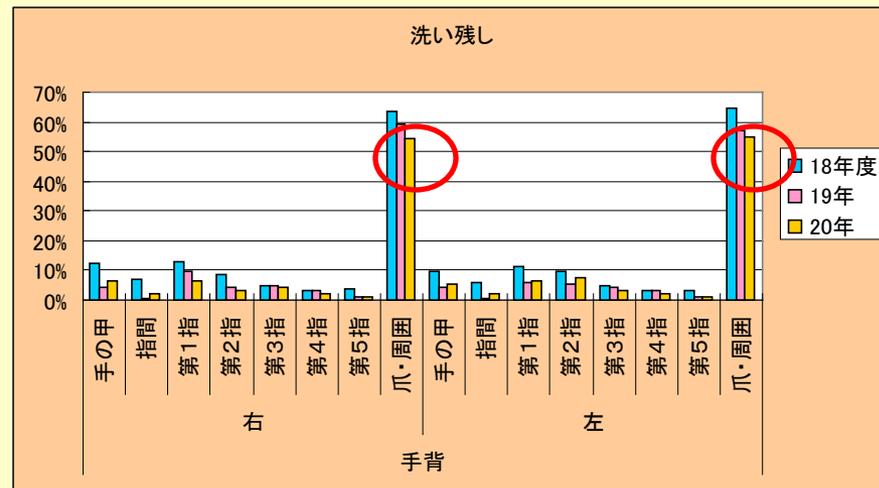
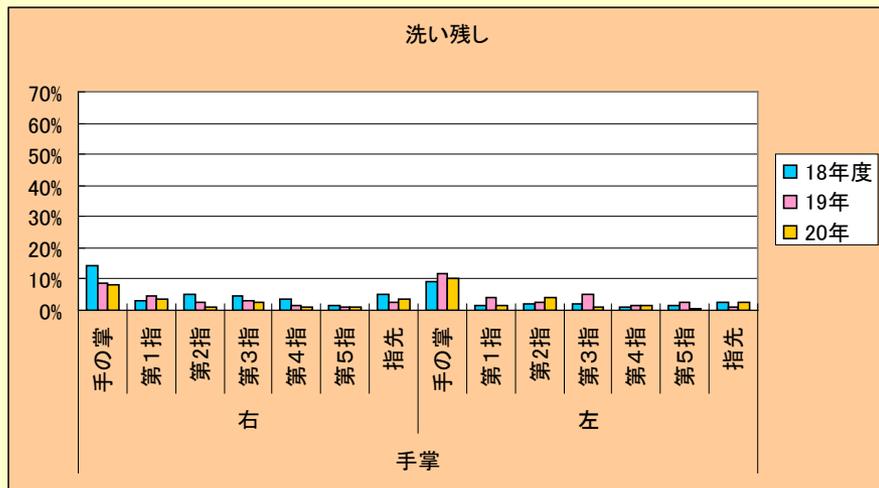


**洗い残しは、爪とその周囲に多かった・診療放射線技師は塗り斑洗い残し共に少なかった**

# 3年間の比較



左手の指の間、左右の第1指や爪とその周囲は改善が見られている



全体的には改善している。爪とその周囲は減少しているが50%以上洗い残している

# 評価実施後の感想

- しっかり洗浄しているつもりでも残っている
- 普段の手洗いで見逃しているところが解った
- 爪周囲や指の間、手首など注意したい
- 年1回でも繰り返し実施することで気をつけるようになった

## 考察

- ◆ 指間、第1指、爪とその周囲に改善が見られたことや手指衛生に関する意識の高まりが認められた発言を得た
  - 継続的な教育と視覚的な評価を行うことでの効果は得られている
- ◆ 同一部位に塗り斑や洗い残しがあるため、部位別に効果的な手指衛生教育の内容を検討する必要がある。

# 結論

当院の手指衛生の実態から考える

教育活動の課題

1. 視覚的な評価を継続
2. 塗り斑や洗い残しやすい部位の  
手指衛生教育の強化
3. 職種別の技術指導方法・  
評価のフィードバック方法の検討